



轢

---

警笛が止まらず鳴り響いていた。

開かずの踏み切りと評判のJR・T塚駅の周辺が、まるで潮が引くように静まりかえってゆく。

カンカンカンカン、カンカンカンカン、カンカンカンカン…

列車通過を告げる踏み切りの音だけが、中途半端に停車した列車の脇腹に反射して夕刻の虚空に響き渡っていた。

僕は何も出来ぬまま、ただ立ちすくむしかなかった。

何故… 何故、彼女は飛込んだのだ？

列車の迫る踏み切りに。

いや。

僕には判っていた。

認めたくなかったのだ。

飛込む直前、彼女と目があったのだ。

栗色のよく動く目が僕を視、その刹那、とてつもない恐怖がそこに走るのを僕は確かに視た。

カンカンカン、カンカンカン、カンカンカンカン…

フラリと足を踏み出した。一步。また一步。

ありえなかった。

彼女が気付いていた筈は無いのだ。僕の尾行を一介のOLが察知出来る訳がない。

昨日今日この稼業に足を染めたヒヨッコじゃないんだ。

冗談じゃない！

理性が悲鳴を上げていた。

それでも足は何かにとり憑かれたように、勝手に前へと進む。

グシュ

柔らかい物を踏んだ感触が靴底から伝わってきた。

ゆっくりと足元を見た僕の目に、白く優しげな指が靴に絡み付いているのが映った。

不思議に血はさほど着いてはいなかった。

悲鳴の代わりに口から溢れ出たのは、胃液とも未消化物とも判らぬドロドロの液体だった。

嘔吐にまみれながら、僕は今度の任務の失敗を悟った。

…これじゃ…これじゃまるで、俺達の方がストーカーじゃないか…

(続く)

## 雨

---

普段からあまり人気の無い事務所が、今日はなおのことガランとして見えた。

受付カウンターの後ろに座る『管制官』豪田に声を掛けると、書類から顔も上げずに右手のペンをちょっとだけ持ち上げる仕草をしてみせた。

相変わらず愛想など欠片も無い男だが、昨日の事件がまだ尾を引いている僕としてはかえって有り難い。

どうせこれから社内会議でイヤという程喋らされるのだ。

自ら進んで話したい理由も相手もここには無い。

「…委員会には社長も出るそうだ。珍しいな」

姿勢ひとつ崩さず、豪田がボソッと呟いた。

この男から話し掛けてくるとは地震でも起こるんじゃないか

「そうか。有り難いこった」

「冴羽祐子は自殺だ。俺達に落ち度は無い。彼女は怯え情緒不安定だった。それで終わりだ。とっとと帰れるさ」

「…」

それきり豪田はまた彫像に戻り、呼ばれた僕は隣の会議室に続くドアをくぐり抜けた。

疑問を携えた心に憂鬱という鍵をかけて。

部屋の中は歪つに眩しかった。

「そう緊張しないで、マァかけなさい」

一般警備部門トップの沼田チーフが声をかけてきた。

こめかみから頬にかけて深く刻まれた凄味のある古傷が不釣り合いな程、物腰の柔らかい男だ。

正面に座っているのが社長。入社式以来、尊顔を拝謁するのは二度目だ。

あとのオエライサンに見覚えは無い。

「任務中、凄惨な現場に遭遇した君の立場は考慮しよう。問題は君達の任務と監視対象たる女性の死に何らかの因果関係が存在するか、だ」

冷やかに社長が言った。

「SS部門の活動について、彼の話聞きながら検討するのでしょうか」

それが、社内会議と銘打った査問会の開始の合図であった。

◇

3時間後、ありとあらゆる疑惑・責任追及の声を浴びせた連中は、結局は確たる関係を見い出せないと結論づけて僕を解放した。

「大変だったな」

立ち去る人影の中から、沼田が肩を叩いてきた。

「SSはヤクザな商売さ。忘れろ、お前が悪い訳じゃない」

「そうでしょうか」

「？」

「彼女は僕を視た。僕の姿に怯えたんです。そんな筈は無い、彼女が僕に気付いていたなんて事は有り得ないんです！」

「そう熱くなるな、お前だってミスを犯さない訳じゃないだろ」

「そうじゃないんです、そういう事じゃなくて… 『SSは弱者の守護者たれ』、僕らはそう教えられてきた、叩き込まれてきた。それが何でこんな結果にならなきゃいけないんですか！？おかしいじゃないですか！！」

SS…ストーカーストッパー。

僕の所属部署。

信じた正義にはいったヒビは、一体誰に直してもらえばいいのだろうか。

外は冷たい雨が…

(続く)

蟻

---

春を好む人は多い。

暖くなる気候、咲き乱れる桜、芽吹く緑。

…そして繰り返される不安定な天気、陽気に誘われ出没する異常者の群れ、群れ、群れ…

僕は春が嫌いだ。

仕事が激増するこの季節が。

あれから一ヶ月、今の任務はツーマンセル、二人体制で進んでいる。

SSは公安や警察上がりの者が多く使われる用語も軍隊じみた言い回しが多いが、今組んでいるのはまだ二十代の若僧だ。

僕と同じ一般部門からの志願者。

18ヶ月の訓練期間を終え配属されたばかりの新人。

畏れも躊躇いも知らぬ、皺の無い犬の顔…

「ダック、移動します」

ファミレスの入口で監視を続けていた新人、酒井から連絡が入る。

右手のPHS…SSは市街地ではPHSを使う。盗聴が難しい周波数を使用しているからだ…を畳み、左でシフトレバーをドライブに入れながらゆっくり車を出す。

最初のストーキングが確認されてから今まで間接接触が5回、直接接触が13回、そろそろ次の段階に移る頃だ。

気は抜けない。

ネストまであと500mだと酒井に告げる。既に先回りして彼女の自宅付近に待機している筈だ。

こちらは15~40m、住宅地で視認されないギリギリの所を、ヘッドライトを消した車で尾行を続けていた。

闇を這う蟻のように。

街灯の下を左に折れると、もう彼女…今度の対象はまだ17歳の高校生だ…の家が見える場所、ここからは酒井が主導となり機動力を持つ僕がバックアップとなる。

ドアを開け暖かい家庭へと戻るその時、不安気に周囲を見回した彼女の目が僕の視線と合ったような気がした刹那、心臓が嫌な音を立て、僕はまたあの踏み切りに立っていた。

飛び散った軀、足に絡む白い指…

猛烈な吐気がこみ上げ、思わず口を押さえハンドルにつっ伏してしまった。

「DNI」

酒井からの連絡でようやく現実に呼び戻される。  
ダック、ネストイン。  
対象の帰宅確認のコールサインだ。

「…了解」

口元を拭いながら短く答えた。

「どうかしましたか？ 声を変ですよ」

「何でもない」

萎えた手の中で震えるPHSに返答した。

「監視を続ける。夜這いがあるかも知れん。俺は1時間したら引き上げる」

「了解」

不満そうな返事だったが構わず切った。若僧は働け。

また1つ長い夜が終る。

蟻には辛い夜だった。

(続く)

郵便受けの状態を仔細に調べ、ドアに挟んだ芥屑の位置を確かめてからでないとも部屋に入れないのは習慣のようなものだ。訓練と長年のSS勤務が僕にもたらした職業病だった。

ドアノブに伸ばした手を止め、顔の前にかざす。

SSはスパイではないが、追跡術や逃走テクニック、盗聴から解錠法までありとあらゆるアブナイ技術を叩き込まれる。

『追う者を知る事が、追われる者を護る力になる』

SS訓練課程の初日に叩き込まれる心得。

逆説的に言えば、僕達SSは各々が世界最高のストーカーになれる力を持っている事になる。

自嘲気味な笑みを浮かべながら、僕は自身の『ネスト』へと入っていった。

社宅と銘打ったワンルームマンション、家具と呼べるものは備え付けのベット位のものだ。

小さなアンティークの机と椅子、コールマンのマグカップとノートPCは僕の私物、後は何も無い。

スタンドのライトをつけ、僕はベットに身を投げ出した。

机に手を延ばし、スクラップした新聞の切り抜きに何度めかの目を通す。

『T塚駅、白昼の悲劇』

『JRで人身事故、通勤の足混乱』

あの事件の見出しが踊っている。

片っ端から集めてはいるが、僕の知る以上の事実は無かった。

非番の時を見つけて、僕はコツコツとあの事件の事後調査を続けていた。会社は依頼者死亡としてその後の活動を凍結していた。僕は誰にも知られず、独力であの『依頼』を遂行するつもりだった。

「私を…守って欲しいんです」

マジックミラー越しに見た彼女、冴羽祐子の切実な声が今も耳にこびり付いて離れない。

ジリリリリリー！！

備え付けの電話が鳴った。



「…はい、真山です」

「沼田です」

予期せぬ相手。

一瞬だが言葉を喪った。

「真山君、あの事故を調べているんですね」

「…」

「悪いが君の素行を調べさせてもらったよ。ナァ、もう忘れないか？」

沼田が言った。

「君が責任を感じているのは痛い程判る、でもな、今更ほじくり返してみた所で彼女は生き返らないんだぞ、解ってるよな」

「…」

「オイ、聞いているのか」

「…すみません、勤務中以外は放っておいて下さい」

「おい？ オイツ！」

構わず電話を切った。

今日は進展があった。

上層部が未だあの事件に関心を寄せているという事実が…

穴蔵の様な部屋で、僕は笑っていたかも知れない。

(続く)

最後の直接接触から半月が過ぎた。

自宅もしくはその至近距離に物的痕跡を残すのが直接接触、勤務・通学先までの間で対象が何らかの不審を抱くような段階を間接触と、僕らは呼んでいる。

今度のエビル…ストーカー御本人を指すコールサインだ…は酷く用心深い。

15回の直接接触のうち自ら赴いた事が一度として無いのだ。毎度、別の誰か、何かを使って仕掛けてくる。

ネット掲示板の脅迫じみた書き込みすら街のチンピラに金を渡してネットカフェからという念の入りようで、勿論、顔を見られるなんてヘマは犯していない。

SSの網に未だ引っ掛からないのはその為だ。

そんな奴がフツツリと気配を消した。

あるいは超ド級の臆病者なのかも知れない。

警戒を緩めはしないが、少なくともツーマンセルの束縛からは解放される事になった。

「真山さん、ちゃんと交替時間には戻って下さいよ」

「アア、判ってる」

「最近、真山さんの様子が変わってみんな言ってます。豪田さんだって」

「豪田が？」

「あっ、イヤ… 指令の後に一言だけ、ですが」

『奴から目、放すな』と酒井に告げたらしい。

同期の心配なんて可愛い真似をする男じゃない。本部管制官として僕の動きを牽制するべきという判断からだろう。

そろそろ動き辛くなりそうだ

「心配するな。この仕事も7年続けると、他に何か欲しくなるのさ。趣味とか、女とか、な」

「へえ〜」

物言いた気に酒井が僕を見る。勝手に誤解してろ若僧。

「このままエビルが消えるという事も考えられる。一定の欲求を満たした後、姿を消したという事例も報告されているからな。だが今回はまだ判らん、絶対に気を緩めるな」

低く告げると、酒井の表情が一変した。

ルーキーとはいえ彼もSSの一員だ。若く、まだ傷の無い正義感もしっかり持っている。

頼んだぞと肩を叩き、その場を後にした。  
ここからは傷付いた正義の為の時間だ。

(続く)

裏

---

風俗店やらサラ金やらがゴチャゴチャと入居している小さな雑居ビルに、その事務所はあった。

私立探偵を使うのには抵抗があったのだが、僕自身に会社の注意が向いている中、細かい活動が制約されつつある。

能力的にSSより劣る点は目をつむり、僕の手足として動いてもらっている。

彼にはもう一つ、陽動部隊としての役目もあった。

「おう真山！ 今日早かったな。マァ掛けな」

小汚いソファの背をボンと叩いた。

依頼主の僕を小僧扱いするのは初対面からずっと変わらない。

「北山さん。何度も言うようですが僕はあなたのクライアントです、イコールパートナーではありません。態度はともかく、その点は忘れぬよう頼みますよ」

「突っ張るなよ。天下のSS様が俺みたいな貧乏探偵を使うってえのは何か裏があつての事なんだろ？」

降ろしかけた腰が止まる。

「中堅商社勤務だ？ 県央総合警備保障と言えば国内最大手のセキュリティサービスじゃねえか。謙遜にも程があるぜ」

「…調べたんですね」

「依頼主の素性を知っておくのは我が身を護る基本さ」

髭面の口元を歪めニヤッと笑う。どうやら期待以上に出来る男らしい。

「例のお嬢さんの足取りをおっかける片手間でオマエさんの事も探らせてもらった。真山悟、33歳。北海道出身。身長178cm体重65kg、防衛大学校卒業後、入隊はせず県央総合警備保障に入社。8年程前に渡米、アリゾナにある同社運営の対テロ訓練学校で一年以上の訓練を受け優秀な成績で卒業。続けるかい？」

「結構。あなたが優秀である事は判りました、だが今日は僕の身の上話で来た訳じゃあない」

「判ってる。さて、と」

やたら馬鹿でかい机の引き出しから茶封筒を取り出して、このイマイましいオッサンは言った。

「始めようか。弔い合戦の続きをよ」

(続く)

北山は思っていた。  
この依頼は最初から面妖しかつたと。

◇

俺の前に座っているこの男。  
若い癖に妙に落ち着き払った態度、隙のない身のこなし、差し出された名刺の胡散臭さ、依頼内容の奇妙さ。  
何をとってもプンプン臭いやがった。

「ある亡くなった女性の生前の事を調べて頂きたいんです」

ここまではいい。

「ただし、その中から僕を除外した、ですが」

…意味が判らん。  
自分と何らかの関係がある相手を調べて欲しいならあえて口にする言葉じゃない。  
人目をはばかる関係だったら黙って依頼すればいいだけの事だ。  
これじゃまるで自分が誰だか調べてくれと言ってるようなものじゃないか。  
そして、判った上で余ったパズルのピースのように自分をどかしておいて欲しいと言外に言っていた。

同業者の匂い。  
それとは明らかに異なる匂い。

こいつは身元を隠したがってる、それは確かだ。だが知られる事をも願ってる。  
恐らくはそれが今度の調査依頼と深く結び付いているからじゃないか。

俺は依頼を受けた。  
そして調査を続けてゆくうち、この若僧のとんでもないバックグラウンドが見えてきたのだ。  
同時に疑問も湧いた。此れ程の男なら何故？ 自分で調べようとするしないのだ。  
個人でも組織としても十分な実力を有する筈なのに。

疑問を抱えたままじゃ仕事は続けられない。俺はぶつかる道をとった。  
多分コイツもどこか早い段階でそうなる事を予想していたのではないか。  
それに最近、俺の周りをウロチョロし始めた連中も気に障るしな。



「俺の方は読んだ通りだ。あの冴羽というお嬢の回りにゃ特に怪しい人間の気配は無かった。あの時期、人事移動で社長秘書に選ばれたという以外は生活面でも変化はない」

「だが何者かに追われていたのは確かなんです。僕達の調べでは、何かに脅えているような発言が複数回あったと同僚の証言も得ている」

「僕達ねえ〜。だったら何故、なにも表に出てこない？ 彼女をつけ回してた奴は幽霊か、それとも忍者の末裔か何かかね？ 自分で言うのも何だが、俺はそれ程無能な探偵じゃないぜ。お前サン程じゃないかも知れんがよ」

その時、真山が凄い目で北山を睨んだ。

「北山さん、いま何て言いました？」

(続く)

空

---

ダック（警護対象者）を見張る時間。  
油断無く店内の気配を探りながらも、酒井は別の事を考えていた。  
二重思考…これも過酷な訓練の成果だった。

◇

だいたいだ、だ。

店舗警備だの交通整理だの、ダダッ広い工事現場のプレハブ小屋で巡回警備という名目で夜鍋だのが嫌で現金輸送の任を志願し、それが沼田チーフの目に止まった事で数年前に創設されたSS要員に推挙された俺が、苦しいという言葉すら笑い事にしかならない程のトンでも訓練を終えて帰国し、

サァこれから人々の影に日向に活躍して幸せを守るヒーローとしての日々が始まるぜっ！

と密かに胸踊らせていた矢先、バディを組まされた相手は何だかワケありのような暗い翳を背中一面に張り付けたような男で初手から調子が狂ってしまいつつ、それでも寡黙にして厳かに任務を遂行してる訳なのは一体どういう星の巡り合わせであるのだろうか？

真山悟という、俺より7つ歳上のその先輩は、俺と組む直前の任務中にあろう事が警護中の女性が目の前で自殺してしまったらしい。いやはや、ご愁傷サマと言うか何と言うか。  
聞けばあの人、それまではバリバリの一線級として上の評価も高かったらしいが、今では要観察者としてマークされているようだ。

不可抗力を気に病み過ぎるからそうなるのだ。SSは過酷な仕事だから、時々頭が変になる奴もいる。

そうになったらオシマイだ、俺も気をつけなきゃ。

この稼業の厳しさが判らない程、俺もガキじゃない。

先輩にも大いに同情の余地がある。

だがなあ、未来あるルーキーにはもう少し…何と言うか…その、色々と伝授したりアドバイスしてくれなきゃ。

これじゃOJT（実戦教育）にもなりゃしない。まんま下っば戦闘員じゃないか。ショッカーの。

あ、噂をすれば影が戻ってきた。

◇



「酒井、交代の時間だ」

「イーッ！」

「？」

判る訳ないかと、酒井は胸の中でひとりごちた。

「真山さん、三分二十秒の遅刻ですよ」

「…」

向かいの席に腰を下ろした真山はしばらくの間、意味ありげな目で黙って酒井を見つめていた。

「何ですか？ 僕の顔がどうかしましたか？」

「…イヤ、まさか、な」

「え？ 何ですって」

「何でもない」

その時、ダック…清水加夏子に男が一人、近付いてきたのに気づくのがほんの僅か遅れた。  
致命的なミスだった。

(続く)

二人は瞬時に席を蹴った。だが。  
店内に悲鳴があがった。

パァッと散る赤。  
目の前を駆け抜ける黒。  
倒れ込む青。

真山はとっさに黒を追った。店の中は修羅場と化していた。  
「酒井っ！ コール！！」  
本部への連絡を怒鳴って指示し表へ走り出た。

足が早い  
もう一つ先の交差点を渡ろうとしてやがる

懸命に追走する真山の目前で、黒い影を避けようとした車が接触し、ガードレールへと突っ込んだ。

クソッ！ 逃がすか！

路面に顔が付きそうな前傾姿勢のまま真山は走り続けた。  
黒づくめの男はしかし、幾つかの角を曲がるうち姿を闇の中に消していった。

逃げられた…

後悔と怒りが、熱泥の様に腸を焼くのを感じながら店へと引き返した。  
目の前でダックが殺傷される…  
悪夢が再び真山を捕えていた。

◇

「……真山さん……」

青い顔の酒井が立ち尽くしていた。

「ダックは？ 彼女はどうした？」

酒井が指差す方には、既にパトカー二台と救急車一台が止まっていて、後部ドアを閉めた救急車

が今まさに出発しようとしているところだった。

「凶器は恐らく日本刀のようなものでしょう。下から上に向かって斜めに切っています」

「…逆袈裟、か」

「とっさに背を向けたのが幸いたようです、テーブルの脚に刃が当たったおかげで致命傷には至っていません。ですが重傷です」

「そうか」

真山は胸の中でホッと一息ついた。

正に不幸中の幸いという奴だ。

「豪田さんが、後は警察に引き継いで本部へ戻ってこいと言っていました」

SSは20XX年の法改正の際、警察業務の一部を代行するものとして認可されてはいるが、本職の領分を侵す事までは許されていなかった。彼らは事件直後の捜査権までは持っていなかったのだ。

この後、何が待っているのか

考えるだけで憂鬱になる

だが今は、被害者が命を繋いだ事を喜ぶべきだろう、素直に

敗北感に苛まれながら真山は酒井を見た。

「帰るぞ、酒井」

「…はい」

酒井も打ちひしがれた様子だった。

無理もない

初めての任務でターキーシュートを許してしまったのだ

無防備の状態でエビルの攻撃を受けてしまうのをターキーシュートと呼ぶ

ダックがターキーとなる…SSが最も恥ずべき事態だ

自信喪失しなきゃいいがな

あの時の俺のように…

赤色灯が照らす路地を、うなだれた相棒の背を押し真山は歩き出した。

(続く)

沈

---

県央総合警備保障、本社ビル13階。大会議室。

4人だけで使うには広すぎると、淡々と続く話を聞きながら真山は思った。

座っているのは彼と酒井、豪田、沼田チーフ。

このあと沼田に何を言い渡されるのか、おおよそ見当はついてた。

◇

「納得出来ません」

沼田が話し終わるのを待って僕は言った。

冷静を装ったつもりだが自信は無い。

「真山… これで二回連続の失態だぞ。此れまでの実績がチャラとまではいかないが、上の評価は地に墮ちている。ここは黙って従った方がいいと思うがな」

相変わらず穏やかな口調で沼田は言葉を続けた。

「埼玉の0Lストーカー事件、仙台の少女連続連れ去り未遂事件、京都の社長婦人脅迫事件。今までお前が守り通してきた多くの人々にとって、お前の努力が、その結果が無になるなんて事は決してない。私達は、その事を勲章として胸に刻んで生きてゆけばいい。上の評価なんて所詮は組織の中での事だ、今は堪えろ」

豪田に目を向けるが、腕を組んだまま沈黙している。

いつも通りの厳しい視線だが、心なしか目の光が穏やかに見えた。

酒井はずっとうつむいたままだ。

「…上は何時から、と」

「引き継ぎと、アカデミー側の受け入れ準備も含めて二ヶ月後といったところだろう」

訓練学校の教官か

ていのいい左遷だな

「酒井は？」

「別のエージェントと組んでやり直した。ナニ、少し休暇をとって気分転換すればスグにまた元通りになるさ、若いんだし。ナァ酒井」

酒井が顔をあげ何かを言おうとしたが、またすぐうつむいてしまった。

「判りました。アカデミー教官の任、御受けします」

「そうか！ 引き受けてくれるか。アリガトウ！」

「…」

沼田と酒井が会議室を出た後、渡された書類を鞆に納めて席を立とうとした時、豪田がその日初めて口を開いた。

「何をする気だ？」

「何も。アチラへ行くまでノンビリさせてもらうさ。貯まった有給休暇を消化するのに丁度いい機会かも知れん」

豪田の眼光が厳しさを増した。

「気を付けろ」

「？」

「他のチームの足を引っ張るようなら、俺も社も容赦しない。それを忘れるな」

黒いセカンドバックを僕の前に置いて言った。

「持ってけ」

中にはSSの標準装備一式が入っていた。

僕は黙って頷くと、鞆とセカンドバックを持って部屋を出た。

あと二ヶ月、か

(続く)

長期休暇が受理されたのは、本社での沼田との遣り取りから二週間が過ぎてからだった。引き継ぎの際、襲われた女子高生、清水加夏子のその後の容態を知った。傷は脊椎に達し歩行機能に障害が出ているという。下手をすれば一生、車椅子の生活になるだろう。

痛みを感じる。

自分の傷の痛みなら耐える事も出来るが、他人のそれは癒しようのない場所に痛みだけを植え付ける。

僕は迷っていた。

残された時間は限られている。冴羽祐子の死の真相を探りながら、清水加夏子の事件まで調査する余裕が今の僕には無い。三日という時間を無駄に費やしたのち、僕は清水加夏子の事件を切り捨てた。酒井が訪ねてきたのだ。

◇

「どうも」

部屋を訪れた酒井のなりは酷いものだった。

いつもシャレたスリーピースに身を包み、軽くウェーブのかかった髪をかき上げながら時々軽口を叩いていた軽薄短小な若者は消え、汚れて雨に濡れたグレーのワイシャツにヨレヨレのネクタイをぶら下げた無精髭の男がそこに居た。ひどく臭いのはアルコールのせいばかりではないだろう。

「酒井…」

言葉に詰まる。何がこの男をここまで墮としたのか聞かなくても分かった。ついこの間、自分も通ってきた道程だから。

「ひどいナリだな。入れよ」

精気無くたたずむ酒井を部屋に招き入れた。

酒井は素直に靴を脱ぐと、家具と呼べる物などロクに無い部屋の角に勝手にゆき膝を抱えて蹲った。

僕は何も聞かず、沈黙の続くがままに任せた。

◇

二時間も経った頃、やっと酒井が口を開いた。

「…真山さん…オレ…判りましたよ」

「何が、だ？」

「ただ…ただ任務をドジった、それだけじゃ…なか…たん…です…ね…」

スタンドの翳が覆い隠した黒い顔が濡れそぼってゆく。

雨降りのように。

こいつは泣きたかったのか

僕の所に泣きに來たのか

「酒井。奴を、エビルを追え。絶対に逃がすな」

ハッとされたように酒井が僕を見た。

「真山さんは… 真山さんも？」

「そうだ。お前はお前のやるべき事をやれ。俺には別の戦いがある。任せた」

酒井が頷く。汚い顔だ。

僕は久し振りに微笑んだ気がした。

(続く)

## 楔

---

閲覧許可の無い書類を見るには、深夜まで待つしかなかった。

本社ビル地下二階にある資料倉庫。

最新のセキュリティシステムも、中から攻められればひとたまりもない。

昼間のうちから出入業者を装って潜入し、夜を待って行動を開始する。エアダクトの寝心地は最悪だったが、身を隠すには最適だ。

顔はわれているから神経質にはなったが、こういう古典的な方法が時に有効な手段となる。

入室用の暗証番号は豪田のPCから失敬した。借りが増えちまったな、彼奴には。

胸の中で仏頂面の豪田に手を合わせた。

お前は初めて会った時からずっと、その無愛想な顔だったな

過去の資料を納めたファイルを片っ端からめくってみる。狙いは3つ。

顧客名簿。

アリゾナにある訓練学校の確保に関わる人脈や金の流れ。

そして解雇・退職者リスト。

もし僕の考えが正しければ、この中に求めていた答えの一端がある筈だ。

室内モニタを意識し、机の蔭でペンライトを口にくわえながら次々にページを追った。

そして…

あった。

しかも3つのうち2つが同じファイルに納められていた。

デジカメにファイルの中身を手早く収めながら、目の前の事実が鍵爪のように食い込む感触を、僕は暗嘆たる気分で感じていた。

◇

翌日、北山探偵事務所を訪れた。

「訓練教官…か」

ドリップ式のコーヒーを入れながら北山が低く呟いた。顔に浮いた脂、はた目にも疲労の色が濃い。

「こっちは完全に手詰りだ。鬱陶しい連中の動きもあざとくなってきたしな」

「どんな事を？」



「ナニ、大したこっちゃない。それより」

カップを僕の前に置きながら北山が真顔で聞いてきた。

「このまま時間切れを待つのか、真山」

「…」

「おい真山、聞いてんのか」

「北山さん、将棋がお好きでしたよね」

「それがどうした？」

「王手はかかってますよ、確かに。でもまだ投了しちゃいません」

持ってきた資料を渡すと、北山の顔に朱が差してきた。

「おい、こりゃあ…」

「大至急、裏をとって貰えませんか」

これが僕の最後のカードだ

真実にたどり着く、恐らくは、唯一の

ファイルをめくる北山が太く笑った。

「王手じゃねえよ。それを言うなら『詰めろ』だ。この勝負、まだ詰んじゃいねえぜ」

だといいが。

いや、そうしてみせると真山は思った。

(続く)

迫

---

自分の何かが変わってしまったと酒井は思った。

◇

あの日、あの光景を、どうしても忘れる事が出来ない。

真山さんもそうなのだ。後悔と怒りと、傷ついた矜持と。

今なら判る。

取り戻さなければならない、でなければこの先、俺は生きてゆけない。

此処でも、何処でも。

休暇をとった翌日から動きだした。

傷害事件として警察の本格的な捜査が既に始まっていたが、俺の見る所連中は初動をミスってる。

『病的な偏執者による猟奇事件』、これが警察の描く事件の大まかなアウトラインだが。

違うのだ。

プロ中のプロたるSSを欺き通した周到な計画性。

ふっつりと姿を消した唐突さ。

警戒の緩む時期を見計らったかのような襲撃。

出来過ぎている。単なる偏執者では有り得ない。

だがこれだけでは優れた知能犯というだけの話だ。

ヒントは真山さんがくれた。あの日、彼が呟いたひと事が。

『…逆袈裟、か』

逆袈裟。剣捌きの一つ。

切っ先を下げた状態から振り上げざまに切る方法。

幕末の昔から辻斬りや暗殺者が好んで用いた太刀筋だ。

いかにも剣を学んだ者がやりそうな事だった。

いや、だからこそ皆が皆、彼女は『殺されかかった』と信じて疑わない。

しかし、それ程の遣い手が狭い店内で、必殺の間合いにまで迫っておきながら…

何故、奴は刺突を選ばなかったんだ？

殺す気なら、刺す。

逆袈裟を用いた時点で、極端な話、奴には殺意など無かったのだ。

警察の考える前提がここで全て崩れ去る。

出来るだけムゴく。

出来るだけ恐怖を。

目に見える残酷な傷を。

それこそが奴の真の目的だとしたら、それは断じてたかが女子高生一人に向けられたものではない。

奴の狙いが最初から、彼女ではなく彼女の近親者に向けての警告なりメッセージだったとしたら全てをつじつまが合うのだ。

捜査当局は怨恨の線も一応は探っていたようだが、俺は独自の線からもう一度、清水加夏子の家族を調べ直してみた。そして思わぬ事実に行き当たったのだ。

真山さんに知らせなきゃ！

(続く)

疾

---

しつこい奴らだと、ゼイゼイいいながら北山は吐き捨てた。

路地を駆け抜けるとすぐ大きな通りに出た。  
手を挙げると、流しのタクシーが目の前に止まる。

「北千住のKYビルまでやってくれ」

運転手は無言で頷くとメーターを倒した。  
走り始めた車の中で荒い息を整えようと、二度三度、深呼吸を繰り返してみる。

クソッ、奴らお見通しじゃねえか

真山の奴から渡された資料を元に、俺は県央総合警備保障の裏の金の流れを探っていた。  
情報屋のワン公（新宿界限じゃ皆、そう呼んでる）が、

「ああアソコね～、最近羽振りイイみたいだけどお～、ナンカ伊能忠商事と仲良くしてるみたいねえ～」

と耳打ちしてくれたのを頼りに調べ上げた事実は、下手すりゃこの国のパワーバランスさえ引っくり返す程のウルトラC級ネタだったのだ。  
今、追ってきてるのは真山の仲間か、それとも内調の息がかかった荒事師の連中か。

「アンタ、追われてるのかい」

運転手が聞いた。

「だからどうした」

「イヤね、実はこう見えて昔は警察関係者だったんですよ。捜査一課の刑事ってヤツ」

「で？」

「さっきから車間を開けて追ってくる車がいる。アレはアンタが目当てなんじゃないかね？」

「ならどうする。昔のお仲間が犯罪者を追ってるのかも知れないぜ」

背中に冷たい汗が伝う。今夜はついてねえぜと内心で舌打ちした。  
運転手は少しの間黙っていたが、やがて弾かれたように笑い出した。

「ヤダなあ、これでも人を観る目はあるつもりですぜ旦那。アンタは犯罪者じゃないし、追ってくる奴らは警察じゃあない。勘ってヤツですよ」

「なら、アンタならどうする」

「真っ直ぐ帰っちゃいけねえ、引っ張り回して、撒くのはそれからだな。運がいい事にアンタ、車に乗ってるしね」

運転手がニヤリと笑った。

何だか知らないが格好の協力者を得たようだ。

「…行き先変更だ、晴海埠頭へやってくれ」

「ハイ」

交差点で大きくハンドルを切り、俺を乗せたタクシーは来た道を反対方向へ走りだした。

黒塗りの車が派手なスキッド音を立てて追ってくる。

真山の携帯番号を押しながら覚悟を決めた。

連中は始末する

調査結果は必ずあの若僧に渡す

こんなケッタクソ悪い話はブツ潰す

と。

埠頭まではもうすぐだった。

(続く)

## 襲

---

相手は全部で8人いた。

しがない探偵風情をいじめるにしては随分な人数だ。

埠頭の暗闇に引きずり込んでから3時間、一人は背後から絞め落とし、一人は海に放り込んだ。今までの嫌がらせのツケを利子までタツプリ付けて払わせてやるつもりだったが、もう既に息があがりかけている。

だらしねえ

学生時代はアメフトのランニングバックで散々走りまくった俺がこの程度でヘタるとは不摂生が祟ってやがる  
これがカタついたらスポーツジムにでも通うか

今の所、連中が銃を使う気配は無い  
お陰で何とかなってる  
だが長引くようなら、ここから先はどうなることか

港湾事務所らしき建物の陰からソロリと抜け出し棧橋へと向かおうとした。  
明るい通り側から離れるのは脱出のチャンスが減る事を意味するが、金輪際近付いちゃいけない場所だった。まず確実に罠が張られている。

その時、いきなり背後から殴られた。  
奥歯を噛み堪え、そのまま振り向きもせず思い切り後方へ跳んだ。  
小柄な男が体当たりを食らってフツ飛ぶ。  
右手に短い棒状の得物を持っていた。起き上がるより早く馬乗りになり殴りつけた。

殴る  
    殴る  
        殴る

気がつけば獣のような叫びを上げながらムチャクチャに殴りつけていた。  
血まみれの男はもうピクリとも動かない。  
我に帰り、肩で息をしながら男を見ると右手が懐に入っている。  
探ると黒く光る銃が出てきた。汗が背をつたい流れ落ちた。

やはり銃を持ってやがった…

コルト ローマン 38口径。

短い銃身をしばし眺めてから、そいつを上着のポケットにしまった。

あと5人か

鈍く痛む後頭部を擦ると、でかい瘤が出来ていた。

男が手放したのは、よく見ると棒ではなく靴下状の布に何かを詰めたようなものだった。

…ブラックジャックなんぞ使いやがって…

のびている男に唾を吐きかけ、フラつきながらその場を後にした。

今の雄叫びを聞いて連中が集まってくるのは判り切っていた。

真山…

早く来い

あと5人を俺一人でってのはチト荷が重いぞ

あとの望みはあのタクシーの運ちゃんだが、そっちは期待薄か

夜が明けるまでが勝負だった。固く噛んだ歯がギリリと軋む。

長い夜だ…

(続く)

風

---

「こんな所で夜を明かすのは御免被りたいものですな」

埠頭の入口近く、黒塗りのベンツのそば。

ビジネススーツの男が、隣に佇む男に話し掛けた。

暗い色のゆったりした服装を身にまとったその男は、心なしか夜風に揺らいでいるように見えた。

「アンタの連れてきた奴らは役に立たんようだ。4時間かかって探偵一人も捕まえられんとは」

スーツの男は胸ポケットからハンカチを取り出し、額の汗を拭いながら答えた。

「御恥ずかしい限りです」

「内閣調査室などと言っても所詮は文字通りの調査・分析屋、荒事に使えるのはあの程度の連中という事か」

「よその諜報機関と比べられるのは些か不本意ですが、おっしゃる通りです。堀川サン」

陽炎のようにユラリと、堀川と呼ばれた男が前へ出た。

「…出番、かな」

「ご冗談を！　ここで連中に指示を出して頂ければそれで充分です。アナタはいかなる時も『表に出てはいけない人間』なのですよ。御忘れですか」

「軽い運動だ、気にするな」

「堀川サンッ！」

揺らいだと見ると、堀川の影はもう埠頭に向かい滑り出していた。

足音も立てぬくせに恐ろしく俊足だった。

スーツ姿の男は大きく溜め息をついて、もう一度額を拭った。

◇

出血は大したことはない。肩と足、二ヶ所を撃たれ三発撃ち返した。

二人は倒したと思う。

もう走っての時間稼ぎは出来ないらしい。

残りは二発、三人を相手にするにはいささか不足気味だな

ビッコを引きながら埠頭近くを彷徨っていると、舐から飛び出してきた奴がたて続けに撃って



きた。

とっさに伏せて、伏射で二発。男がもんどりうって海に落ちた。立ち上がろうとしたが足に力が入らない。腹に一発食らってた。

あぐらをかいてハンカチを真っ赤に染まった腹に当てた。

こりゃあ…持ちそうにねえなあ…

激痛と脱力感に捕われながら北山は思った。

真山…

あのお嬢は自殺なんかじゃなかった  
ハメられたんだよ、お前と同じように

あぐらのままへたり込んでいる北山の前に黒い影が立っていた。死神のように。

「なんだ。これじゃ肩慣らしにもならんな」

死神が呟いた。

(続く)

鴉

---

「タフだな、あんた」

倉庫の灯りを背に、細長いシルエットが話し掛けてきた。殺気は感じない。威圧感のようなものだけが漂ってくる。

「オレが片づけた連中とは違うな。何者だテメエ」

精一杯ドスをきかせたつもりだったが、穴のあいた腹に力はいらなかった。

「名無しの影法師…かな」

「ケッ、ふざけた野郎だ」

銃口をゆっくりとシルエットの男に向けた。

「消えろ。10数えてやる」

シルエットが肩を震わせたように見えた。

「そんな手付きで当たるか？ ユラユラ揺れてるぜ」

「試してみるか」

銃をダブルハンドに持ち変える。

「おやおや、元気だな」

「捜してるものならモウねえよ。あちこち送っちゃった。俺はこのザマだが、貴様らにも先は無  
いぜ」

「ハハハ…」

笑いながら影が近付いて来た。

「なら今夜を楽しむとするか」

「動くな！」

「いいぜ、撃ってみな。タマがあるならな」

野郎…

数えてやがったか

顔が歪むのを北山は抑えられなかった。

◇

車を降りた瞬間から、真山は肌を刺すような感覚に襲われた。

訓練生時代さんざん味わったあの感覚

狩人と獣と、血の気配…

いや、匂う

濃い血臭が埠頭の先のほうから漂ってくる。

真山は無意識に走り出していた。駆け抜ける視界の隅を倒れた人影がかすめてゆく。

大の字でのびていた男は激しく殴打されたように顔を朱に染めていた。

埠頭の中程に二つの姿が見え、真山は足を止めた。

座り込んで銃を構えているのは北山か。どうにか間に合ったようだ。

もう一人は…

強烈な既視感が真山を襲った。

あの姿、異様な雰囲気を持ちながら、まるで今にも闇に溶け込んでしまいそうな佇い…

街角の暗がりには霞むように消え去っていった、あの時の黒い影…

エビル

吹きあげたアドレナリンに理性を吹き飛ばされるまま、真山はニーリングの姿勢でたて続けに4連射を放った。

ガシュ！

ガシュ！！

ガシュ！！！！

ガシュ！！！！

銃声は無い。

SSの使用するショックガンは特殊なスプリングで有線電極を30m先まで飛ばす。

命中すれば全身麻痺が1時間は消えない。命中すれば。

男は数歩ステップバックして射線を外すと、こちらを見て軽く微笑んだ。

「貴様あ！」

「いきなりスタンガンとは芸が無いな。君が真山君か？」

「俺を知ってるのか」

「可愛い後輩には名乗らねばならんな」

男がゆっくりと向き直った。

「鴉だ」

(続く)

起

---

◇

かつて21世紀を迎えた我が国は、景気後退とそれに伴う失業率の上昇、加えて若年層の就労意欲の低下という三重苦を抱えたいびつな高齢化社会となり、国内に多くの不安要素を抱えた政府は外国人労働者の無期限採用禁止と25歳以上の成人に対する労働義務化という思い切った対策を実施した。

その結果、見掛け上の就労者所得は増加し株価も上昇に転じたが、世代間格差はより深刻な問題となり、若者による高齢者への、又は逆に壮年者・高齢者による未成年・若年層への犯罪行為が激増の一途を辿っていった。

その異常な増加率は警察機構の治安維持能力を越える事が確実視され、対応に窮した当時の内閣は、警察権力の一部民間企業への委譲というウルトラCで状況の打開を図ったのだった。

当時、業界では中の上程度であった県央総合警備保障は、参入一番手として積極的に事業規模を拡大し、瞬く間に国内NO.1セキュリティサービスの地位を確立していった。

産まれたばかりの対異常犯罪部隊・SSはその発足当初、人材・経験共に不足しており始めの頃は手痛い失敗を繰り返していた。そんな創設期、まだ数の少ないSSの中で異彩を放つ男がいた。

今ではなかば伝説化したその男は陸上自衛隊レンジャー部隊の出身で、その索敵能力と小部隊での指揮能力の高さを買われてスカウトされたのだが、火薬式の武器…拳銃、小銃、機関銃の類い…の携行を許されない弱小武力集団とでも言えたSSを、たった半年で屈強の対犯罪組織に作り変えたのだ。

指揮官としての能力も卓越していたが、彼自身は単独行動を好み、最も重要な局面では必ずと言っていい程一人で事に臨んでいたという。そして犯罪者の拘束率は常に90%オーバー。恐るべき値であった。

夜間戦闘に優れ、捕まる前に彼の姿を見た者は一人として居ないところから、彼は仲間には尊敬と畏怖の念から、犯罪者・異常者からは恐怖を込めてこう呼ばれたそうだ。

闇夜の鴉、と。

◇

「…貴様か…貴様があの時の…」

真山は吐き捨てた。

「真山、お前知ってるのか？」

土気色の顔をした北山が驚いたように言った。

「リストにあったでしょう。堀川烈。元SSエージェント。現役時代の呼び名は、鴉。そして…  
清水加夏子の事件の実行犯。貴様だったとはな」

真山が一步を踏み出した。

「お前が俺を、ストーカーに仕立て上げたのか」

(続く)

鴉と名乗った男は静かに立っていた。  
正面から向き合い、真山は口を開いた。

「ずっと疑っていた。冴羽祐子が俺の目の前でバラバラの肉塊になったあの日からずっとだ。彼女は俺の姿に怯えて衝動的に踏切をくぐった。だが… そんな事は起こり得ない。俺は彼女の視認範囲に立った事すらなかったんだ」

目の前の男に叩き付けるように言葉を続けた。

「長いこと考え続けてきた。俺が身内を疑ったのは、そこにいる北山さんの一言がきっかけだった。幽霊のように存在を察知されず、対象をつけ回し、脅かし、意図した破滅へ向かわせる。そんな事が可能なのは他ならぬ俺達SS以外に存在しない」

堀川が口許をつり上げた。  
V字を描く悪魔の笑みだった。

「貴様の名は、顧客リストと一緒に本社の地下資料室に隠されていた。死んだクライアントの名の下に『担当』と。真っ先にしたのは、貴様の名を退職者リストから見つける事だった。時間はいらなかったよ、有名人だからな」

背後に回していた右手を拳に変えて、真山は堀川へ向け突き出した。

「俺を…俺がストーカーだと、貴様が彼女に教えたんだなっ！」

クックックッ…  
アッハッハッハァー！！

死神が地獄の爆笑を炸裂させた。

「よくそこまで調べたな、たいしたモンだ。さすがアカデミー設立以来の逸材と言われるだけの事はある」

洪笑に身をよじらせながら堀川が言った。

「ご明察だ。で、どうする？」  
「清水加夏子を襲った理由は何だ？」

真山がにじり寄る。

「知りたいかい」

「ああ。今ここでなっ！」

真山が右手の粘着球を投げつけた。

トリモチの親玉みたいな球は、圧縮された粘着剤を3m四方へブチ撒ける。

身をかわした堀川の後ろで北山が白い粘着剤に包まれた。

「ウガッ！」

「甘いよ真山君、SSの武器はよく知って…！？」

堀川の足許にも粘着剤が弾け、片足を路面に張り付けていた。

真山は一挙動で二発の粘着球を投擲していたのだ。

「伝説の鴉もこれじゃただの害鳥だな。堀川烈…お前を捕縛する」

「…きさまあ…」

右足をコンクリートからもぎ取るように引き剥がすと、堀川は赤く目を光らせ膝を落とした。粘着剤は靴もろとも堀川の足の肉まで路面に癒着させていた。

「これじゃ楽しめそうもないな。今夜はここまでだ。またな」

身を翻した堀川が海へ飛込んだ。

後には白い泡が残るだけだった。

(続く)



助

---

「北山さん！」

粘着剤にまみれた北山に真山が駆け寄った。

「撃たれたんですね」

「オマエ怪我人になんてコトしやがんだ。紅白まんじゅうだぞ、これは」

血の赤と粘着剤の白で北山は奇妙なオブジェとなっていた。

「待って」

ジャケットの懐から特大のスキットルを取り出し、中身を頭から北山に浴びせかけた。

「ブハッ！ちよっ…こりゃ…なん…パァ～！」

「剥離剤です、綺麗に取れますよ」

脱いだジャケットで北山の軀を拭いながら真山が聞いた。

「よく無事でしたね、何発食らいました？」

「三発だ。肩、足、極めつけは腹のド真ん中に、な…」

ガックリと北山が前のめりになる。

「北山さんっ！？」

「…大丈夫だ、バックルに当たっらしい。ハラに穴は空いたが、弾なら摘んで捨てちまったよ」

「ったく、悪運の強い人だ。歩けますか？ 病院まで連れていきますよ」

「アァ、やってくれ」

肩を貸して北山を立ち上がらせると、真山は自分の車へ歩き出した。

「サイレンが聞こえる…」

「騎兵隊にしちゃ遅過ぎるな」

あのタクシーの運転手が通報したに違いない  
微妙に間に合わなかったが、マァいいだろう

辺りに転がっている連中は綺麗に掃除してくれる筈だと、真山の肩にぶら下がりながら北山は思った。

さんざんいたぶってくれた礼だ  
腹一杯クサイ飯を食らいやがれ

「俺あマダマダ負けんぜ、真山」

「？」

「お前と勝負してもいい。やるか」

「遠慮しときますよ」

肩越しに、真山の笑う気配が北山にも伝わってきた。

「血まみれは御免です」

「…6人だ… マッタク、よく生きてたもんだ。チャカまで出しやがったんだぜ」

あの男はまた現れると、真山は思った。

そう遠くない日に、必ず。

「恐ろしい奴だったな」

北山がボソリと言った。

「ええ」

「ジャンパー、すまなかったな。汚しちまって」

北山がわざと話題を変えた。

「せめてジャケットって言って下さいよ」

「ハハハ」

もうすぐ夜が明けそうだった。

(続く)

## 真

---

都内の某総合病院。

やたらだっ広いエントランスを抜けると、開いた自動ドアからひんやりとした空気が流れ出てきた。

酒井は一階の受付前のベンチにポツンと座っていた。

午前の診察が終わり、まばらな人影の中で酒井の姿は影絵のように見えた。

「真山さん」

ジッと前方を睨んでいた酒井が、気配に気がついて顔を上げた。

「呼び出されるまでもなかったよ。知り合いが入院してるんだ」

「知り合い…ですか」

「俺の方を手伝ってもらってる探偵さ。軀じゅう穴だらけにされてな、ここに担ぎ込んだ」

「!？」

「なに、命に別状はない。やたら頑丈な人でな、そんな目にあつたというのに6人返り打ちにしたよ。体力だけなら俺達並みさ」

笑いながら言った。

「で、お前の用件は？ わざわざ病院に呼び出したのには訳があるんだろ」

「あの娘が入院してるんです」

「…清水加夏子、か…」

「あれから毎日、見舞いに来てるんですが。彼女、喋れないんです」

「何だって？」

「事件のショックが大き過ぎたせいで、一時的な失語症になっていると医者が言っていました」

「…」

「歩けない事も拍車を掛けているようです。回復の見込みは医者にも判らんそうで、足と一緒にこのまま一生ダメかも知れないと」

うなだれた酒井を自分に重ね、真山も溜め息を漏らした。

「今、彼女に同情しても始まん。情報があるなら聞こう」

「彼女の父親、清水恒彦は伊能忠商事の専務です。伊能忠商事は政界に太いパイプを持っていて、現政権と米国政府との橋渡しを担っていると専らの噂です。その恩恵に預っている企業も多く…その…」

「我が社も御多聞に漏れず、か」

酒井が目を見開いた。

「知ってたんですか？」

隣に腰を降ろしながら真山は言った。

「知ったのはつい先日だ。本社の資料室に、使途不明金の帳簿があった。相手の1つが伊能忠商事だというのは穴だらけの探偵が調べてくれたよ」

「だとしたら、敵は身内… 一体誰が？」

「判らん。社全体がグルなのか、ハネッ返りが裏でヨロシクやってるのか。少なくとも実行部隊の一部にはSSのOBが絡んでいる」

「誰ですか？ そのイカレた野郎は」

「鴉だ」

酒井が息を飲んだ。

(続く)

父

---

「鴉って… あの伝説のSS？」

「そうだ。俺も会ったよ。恐ろしい奴だった」

真山の声のトーンが落ちた。

「冴羽祐子の件も奴が仕組んだ事だったのさ」

「え？」

「監視の任にあった俺の顔や姿、特徴を何らかの手段で彼女に教え、俺がストーカーだと信じ込ませたのさ。恐怖心を植え付けるような小細工と一緒に。奴には兇戯の類이었다ろう」

「そうですか。でもまだ」

「ピースが足りん。清水加夏子の件はかろうじて線が繋がったが、何故、協力関係にある社の重役をわざわざ退職者を使って脅さねばならなかったのかが判らん。冴羽祐子についても、自殺幇助のような形で追い込まなければならぬ理由が謎だ。ただ…」

「ただ？」

「彼女が勤めていたJSフードが最近、在日米軍へ加工食品の納入を始めた。老舗の食品会社だが、この件が決まってから株価はうなぎ登りらしい。アメちゃんとの仲介をしたのが」

「伊能忠商事」

真山が頷く。

「やはり真山さんと呼んで正解でした。来てますよ、清水恒彦氏が」

酒井は通路の奥へと、ゆっくり視線を動かした。

人影が二つ。ガッシリしたスーツの男と、小さな女。恐らく夫人だろう。

真山は立ち上がり二人に歩み寄った。

「？どなたかな」

男が問う。真山より背が高い。

「清水恒彦さん、ですね」

「警察の方か。加夏子はその通り何も喋れんよ。これ以上は… 御引き取り下さい」

「私はSSのエージェントです」

途端に清水の軀が怒気で膨れ上がった。

「SSだっ！？ どんな顔してここへ来た！ 娘をあんな目にあわせておいてノコノコ何の

用だっ！！ 恥を知れ恥をっ！！」

真山の胸ぐらをわし掴みにして絞め上げてきた。

「お前らがちゃんと娘を守っていればこんな事にはならなかったんだ！ それを…それを…貴っ様あああー！！」

拳を真山の頬に叩き込む。一発、二発。  
涙と鼻水を垂れ流しながら清水は吠えていた。

あわてて駆け寄ろうとする酒井と警備員を手で制し、真山が軽く前屈みになった。  
胸ぐらを掴んでいた清水がへたり込むように下へ潰れる。

二教落とし。  
合気道の技だった。

「娘さんを襲ったのも、私と同じSSだったんですよ」

真山が小さく呟くと、汁だらけの顔が睨み上げてきた。

「知ってる事、全て話して下さい」

(続く)

# 告

---

ベンチに腰掛けた清水は長いこと黙ったままだった。  
促す事をせず、真山は酒井と並んでただ待っていた。

「あの国は常にナンバーワンである事を望んでいる。それが神への義務だと本気で考えている」

永い沈黙ののち、訥々と清水が語り出した。

「…我が社は長い、長い時間をかけてあの国の中枢に食い込んできた。軍事、経済、政治。あらゆる分野でだ。お陰で20世紀末から今世紀にかけて、我々は莫大な利益を享受した。そのあまりにも多大な恩恵に我々は盲同然になった。忌まわしい911の悪夢から始まったあの国の狂気が、今も暗いマグマのように流れている事に気付いたのは、私を含めごく僅かだった」

何処を見るでもなく、滂々とした表情で清水は語り続けた。

「始まりは君達SSだった。アリゾナの訓練施設の誘致で県央総合警備保障と合衆国の仲立ちをした際、密約があったのだ」

話を聞く真山の目が厳しさを増した。

「優秀な訓練施設とスタッフを自国内から外に出したくなかったのだろう。10年後には施設、人材もろとも合衆国に譲渡する事。これが唯一の条件だった」

「そんなん！」

酒井が叫んだ。

「俺達は売り物の犬コロ同然じゃないか！」

「勿論、君達の待遇は保障される。米国籍を取得し、合衆国に忠誠を誓うというのが絶対条件だがな」

噛みつかんばかりの勢いだった酒井が沈黙した。

「ある日、私はひとりの男と会った。内閣調査室の植草と名乗ったその男は、君達SSが国内治安の維持と対外的な我が国の『安全』というイメージの確保にいかにか大切な存在かを延々と語って聞かせた。決して失ってはいけない宝だと。私は決心した。10年を待たず君達SSを内閣調査室の実働部隊として国家組織に組み込む事を。その為の社内工作を始めたばかりの頃、娘への悪辣な行為が始まったのだ」

そこまで語り終えると、清水は溜め息をひとつ漏らした。

「私が合衆国に逆らったのが全ての元凶なのだ。テロへの恐怖はあの国のDNAに刻み込まれている。我々が優秀なテロリストに等しい人材を抱える事に連中は耐えられなかったのだ」  
「国のエゴが、一人の少女の未来を奪う。許されていていいとは思いません」

静かに真山が言葉を添えた。

「理不尽な暴力から人々を守る、それが私達の使命です。誰かの駒などではありません。断じて」

それが生きる理由なのだ

真山は胸の中で呟いた。

(続く)



友

---

「……………」

待ち伏せ同然に現れ、訳も言わず薄汚い飲み屋街へ誘う僕と酒井にも黙ってついてきた。前後を挟まれる形になろうと、片足を引きずるようにしながら平然と足を進めている。動揺や詮索は一切無い。

赤提灯に陣どり、僕と酒井が交互に口を開く。  
ピンと張り詰めた緊張感が薄い被膜のように屋台を包んでいた。  
それが破れるような事があれば、二人がかりでも敵うかどうか。

話が終わった。  
重苦しく湯気が屋台の闇に紛れ漂う。

「無い」

鉛のような言葉をボトリと口から落とすと、豪田はゆっくりと僕達を見た。

「確証。動機。メリット。一つも無い。論外だ」  
「でも豪田さん、全ての出来事はただ一点で繋がっているんです。冴羽祐子の自殺、清水加夏子への傷害事件、鴉の出現。その全部に関わっているのは俺達SSなんですよ」

酒井がたて続けにまくし立てた。

「真山さんが捜し出した本社の資料、清水恒彦の語った話、全部俺達の作り話だと言うんですか！？ オマケに真山さんが雇った私立探偵は襲われて入院してる。これだけ傍証が揃っていてあと何が必要だと言うんですか！」

豪田が今度は真山を睨んだ。

「俺のPCを覗いたな」  
「そんな事どうでもいいじゃないですか！ 何ですか、小学生の宿題じゃあるまいし…ングッ！」

やにわに伸びた巨大な右手が酒井の顔ごと口を塞いだ。

「俺にはSS以外の社員も面倒見る義務がある。出稼ぎのオヤジもお前らも、日銭を稼いで生きるんだ。聞いた風な口をきくな」

ミシミシと酒井の頭蓋骨が軋む。  
喜怒哀楽を見せない男が本気で怒っていた。

真山が豪田の手を抑えた。

「昔から、そういう奴だったな」

添えた手に力は無い。

「地獄の訓練課程。終わりなど無いと思っていた日々が過ぎ、やってきた最終訓練の日。お前は俺をかばって教官達の実弾を浴びた。あの日から… お前の右足は満足に動かなくなっちゃった。ずっとそれを負い目に思ってきた。今また、お前に助けてもらわなきゃならない」

いつの間にか手を離れた豪田がじっと真山の目を覗き込んでいた。

「何故、今その話をする」

「辛かった。稀代のSSになる筈だった男を俺が潰してしまった。今も辛い」

豪田と真山が睨みあう。

◇

「嘘じゃ無い事位は判る」

長い沈黙の後、豪田は重々しく口を開いた。

「何をしてほしいんだ？」

(続く)

三日続けて清水恒彦氏と接触を持った。

時を置かず酒井が与党々本部、官房長官宛に一冊のファイルを送っていた。

現首相は無派閥で指名選挙を戦い、今なお党内に指示基盤を持たない。

彼のバックボーンは国民の圧倒的支持率と、米大統領の強力な後ろ盾だけだ。

現在の国際情勢、国内でのパワーバランスや次期首相の椅子を巡る勢力争いを考えると、今回の一連の出来事に首相が絡む余地は極めて小さいと踏み、ターゲットを与党最大派閥出身の官房長官に絞った。

彼なら首相の補佐として内閣調査室を取り込む事もさほど難しい話ではない。

何より彼は以前、伊能忠商事との黒い繋がりをスクープされた過去があった。

それが現在も脈々と続いているという情報も得ている。

勿論、首相自身に関わっている可能性も無くはない。

だがこれ以上、証拠集めに費やせる時間は無かった。

賭けだった。

◇

4日目に、沼田から連絡が入った。

「休暇中に済まないね、真山君」

「何か？」

「実は困った事になってね、豪田君なんだが」

受話器を握る手に汗が吹き出してくるのを感じた。

「豪田がどうかしましたか？」

「いやな、鬼の何とかじゃないが、風邪で寝込んでしまってね、警備スケジュールを管理する者が居なくて困っているんだ。渡米前のこの時期に申し訳ないんだが管制デスクを見て貰えんか。道路工事もたて込んでてな、みんな文句タラタラなんだよ。どうだ？ 御願い出来ないか？ 埋め合わせは必ずするから」

電話の向こうの沼田の様子が目に浮かぶような弱りぶりだったが、真山はとても同情する気になどなれなかった。

「判りました。今夜2200に本社へ伺います」

「そうかっ！ 済まない、恩に着る。じゃあ10時に本社でな」

電話が切れた。

代りに北山の見舞いへ行っている酒井に連絡を入れた。

「来ましたか」

酒井の声も心なしか緊張していた。

「ああ。沼田さんだったよ」

返事はしばらく無かった。

「そうですか…」

「豪田が心配だが、アイツは殺しても死なんよ。例え相手があの鴉でも、な」

酒井に言いながら、真山は自分自身に言い聞かせていた。  
あのヘラクレスがやられる筈が無い、と。

「本社へ向かう。お前は30分遅れで来い」

「ハイッ！」

「多分…鴉が待ち構えてる。頼むぞ、バディ」

言い終わって真山は電話を切った。  
ベットの背に掛けたケブラー製ジャケットに腕を通す。

決着の時間が近付いていた。

(続く)

撃

---

夜のシフトは阿佐ヶ谷を先にしますか？  
それとも首都高？

本社管制室に入るなり聞いた。  
いずれの問いにも沼田は黙っていた。

「沼田さん」  
「…猿芝居はよせ、真山」

別人のように冷たい声が響く。  
今度は真山が沈黙する番だった。

「豪田がお前に接触した事は知っている。いいものだな、友達って奴は」

ポケットからクシャクシャのショートホープをとり出した沼田が一本くわえると火をつけた。

「お前らに手を貸しているとピンときたよ。昨日、地下保管庫の件で相談があると言ってやって来た。D5ロッカーを処分しようと思うがどうか、とな」

「それで？」

「お前らSSの連中はともかく、本社勤務の人間なら誰だって、Dシリーズロッカーの中身が最重要機密だと知ってるさ。だから一般職員の居る前でそれを口にされてもどうという事は無かった。だが…」

煙草の灰を床に落とした。

「DロッカーはN0.4までしか使用されていないのだ。正式には、な」

冷や汗が出たぜと苦笑しながらゆっくりとこちらを向いた沼田の手に、鈍く光る拳銃が握られていた。

「冴羽裕子は何故、あんな目に？」

「知ったからさ。JSフードが在日米軍に取り入る際、伊能忠商事を通じ莫大なワイロをある大物政治家に渡した事を。社長秘書に成りたてだったあの女には不運な偶然だったがな」

親指が撃鉄を起こす。

「その一部は貴方の手にも渡るといふ訳ですか。それとも誰か他にも？」

「フン、高給取りにこれ以上なにが要るもんか。奴らSS部門をアメ公に売り払って、とっとと楽になりたいのさ。治安維持の要求は企業のレベルを越えてきている、補助金やら報酬やらじゃとてもやっていけないものになりつつあるんだよ。採算が合わんのだ、お前らは」

「貴方は反対なのですね、沼田さん」

顔色を窺いながら、真山はそろそろと会話を引き延ばしにかかった。

「だから内調と組んだ。その政治家とやらは次期総裁選を控えた今、スキャンダルが命取りになる。彼が潰れる事はSSの特務機関化がファイになるのと同じですからね」

「その口調では、彼が誰なのかもあらかた見当がついてるのだろう」

「現官房長官、矢部信次…」

「残念だよ、真山」

轟音が響き渡った。

(続く)

## 別

---

3m程距離を置いて、真山と沼田は対峙していた。

沼田の手には45口径オートマチック、真山の顔の脇の壁には弾痕がひとつ。頬から顎へドロリと流れる血を拭うことなく、真山は沼田に話し掛けた。

「下手ですね、銃」

「防弾ジャケットじゃ貫通せんだろ、こんな古臭い銃は」

「頭は丸腰です」

真山が微笑んだ。

「軀を狙うのが基本でしょう。それにブン殴られるより遥かに強烈だ」

貫通力は無いが、低速大口径の弾丸は恐ろしいマンストップパワーを持っている。強烈どころか10tトラックに正面衝突するに等しい。防弾ジャケットは表面を護るだけに過ぎない。

「このまま黙って胸にしまっておけないか、真山。お前は必要な人間だ。ホンの少しこいつを動かして、一発撃てばそれでオシマイなんて男じゃない」

沼田の手の中で微かに銃口が揺らいた。

「お前は俺とは違う。俺は拾われた男だ、害獣駆除から命からがら生き延びたドブネズミだ。この社長が俺を拾った。俺はアイツの道具として生きるのを甘んじて受け入れた。だがアイツは… 社長はこの国の行く末なんてどうでもよかったんだ！ 国を護る力を持ちながら、むざむざそれを放棄しようとしているアイツは腐った売国奴だっ！」

銃口が嵐の中の小船のように揺れ動いていた。

「沼田さん…」

初めて見る沼田の激情に、いつか真山も我を忘れていた。

「大義があれば何をしても許されるのですか。冴羽祐子にも清水加夏子にも、彼女達なりの未来があった。小さくて、世の流れに紛れてしまうようなちっぽけな未来かも知れませんが、それを守るのが俺達の役目なんじゃないんですか！？ 国家だの何だの、そんなモノ、一人の幸せが無くて何だというんですかっ！！」

激しく言い放ち、激しく睨んだ。

沼田も睨み返してくる。

…随分と時間が過ぎたように感じたが、一分もしていないだろう。

気が付けば向けられた銃口は下がっていた。

「俺がそんなに撃ちたいと思うか」

穏やかな目に戻った沼田が銃をぶら下げ歩み寄ってきた。

その時。

くぐもった音と同時に、沼田がこちらへ倒れ込んできた。

「沼田さんっ！」

「…安田が墜ちた…あの日…オレ…も…しん…」

沼田は息をしていなかった。

管制室の入口に、サイレンサー付き銃を構えた堀川が薄ら笑いを浮かべて立っていた。

貴っ様あああああ～！！！！

真山の叫びが夜のビルに木霊した。

(続く)



# 狼

---

◇

久しくこんな獲物は御無沙汰だった  
狩りはこうでなくては

ギリギリと牙を噛み締め、今まさに跳びかかるとする獣に向かい、鴉こと堀川は言い放った。

貴様を狩る

獣が人の言葉で返す。

「クロス…お前だけは…」

「いいぜ。やってみな！」

旋風が巻き起こり、獣が視界から消えた。  
机の上に残された書類が竜巻に吹かれたように次々と宙に舞う。  
堀川は横一文字に掃射を加えながら瞬時に己れの不利を悟った。

狭い室内。

障害物。

防弾ジャケット。

サイレンサーで威力を削がれた銃。

そして相手の見せた異常なスピード。

弾倉が空になるまで撃つと、堀川は躊躇無く銃を棄てた。  
背を向け管制室から飛び出すと、非常階段を屋上に向かって駆けあがる。  
右手には大型のマシェティ、山刀を握っていた。

オレについてこれるか

屋上のドアを一撃で蹴破ると、屏々と吹く風に身を晒しながら出口へ振り返る。  
10秒も経たず獣が姿を現した。

すばらしい

最高の夜だっ！！

気も狂わんばかりの歓喜に包まれながら堀川は牙剥く獣へと斬りかかった。

鍛え抜かれ、幾人もの血を吸った堀川の山刀は幾度も空を切り、幾度かは浅く獣の軀を斬った。  
獣の牙も堀川の軀に傷を刻む。  
二人共血まみれだ。  
獣が漸く勢いを弱めた。  
手からナイフが落ちる。

勝期！

山刀が唸りをあげて獣の頸を襲った。

堀川が勝利の確信に酔った刹那、逆転は鮮やかに生じていた。  
山刀を握った手首に手刀が当たり、獣がその腕を掴んだ瞬間、一回転しながら堀川の肘の逆を取り後頭部から投げ落としたのだ。

◇

四方投げから固め技に移行しても、堀川はピクリとも動かなかった。

「バケモノだな、貴様」

しばらくして意識が戻った堀川がポツリと言った。

「俺はニンゲンだ」

獣から戻った男… 真山が答える。

「殺しに悦びを覚えるお前こそバケモノだ」

抑え込む真山の指先から滴る血が、ビル風に舞った。

(続く)

決

---

テグスで後手に縛り上げた。  
手首でなく親指の関節を縛るSS流の拘束術だ。

懐かしい遣り方だなと、無抵抗な堀川が言った。

「未だに判らない事がある。清水恒彦の娘に何故、あんな事をした。お前は内調と組んでいた筈だ、SSの米国流出を阻止しようとした彼にプレッシャーを加える理由など無い筈だ」

真山の問いにも、堀川は視線を遠くに向けたまま答えなかった。

「沼田さんを射つ理由も無い。もし俺が仲間になると返答したらどうするつもりだったんだ？」  
「その件については私から御答えしましょう」

不意の声に振り返った真山の目に、スタスタと歩んでくるスーツ姿の男が映った。

「植草」

堀川が目を見開いた。

「内調はまだ弱い。強大な他国の諜報機関群と互してゆけるようになるのはまだ先の話、それまでは米国に貸しを作り共存共栄を図らねばなりません。既に動きだしたSS特務機関化については今更止められませんし、我々もそれを望んでいます。しかし首謀者とも言うべき人物を何事も無く済ますのは彼等のメンツにかかわりますからね。我々は手に入れるであろう力を、彼等は最強諜報機関のプライドを。それぞれがそれぞれ、己の利益の為に拳を開いて手を差し出したという訳です。そうしてさえおけば、あの国のテロリストアレルギーも彼等が裏から抑え込んでくれますしね」

胸ポケットからハンカチを取り出し、スーツの男が額を拭った。

「本人だけ制裁した所で彼等は満足しませんから」

「だからストーキングを仕掛け、罪も無い女の子の将来を奪うような真似をしたっていうのか!？」

「私らには結果が全てなのです。沼田さんも然り。口を塞ぐのが最も確実である相手に情けをかけるというリスクな選択をした。堀川さんには予め、こういうケースでの対応を御願いしてありましたから」

ハンカチをしまうと、懐から銃を取り出し真山へ向けた。

「彼を渡してもらいましょうか」

「…」

真山が堀川から手を離す。

立ち上がった堀川が奇妙な仕草で肩を回すと、腕が身体の前に揃った。

関節を外して自由になった手で縛られた親指を捻るとテグスがとれてポトリと落ちる。

「お前を狩るのは又のおあずけだ。次は殺す。じゃあな」

ニヤリと笑った堀川がその場を去ろうとした時だった。

「全員動くなぁっ！！」

冗談のように巨大な銃口を開いた大型銃を水平に構えた酒井が、仁王立ちで叫んでいた。

「与党本部には今頃、地検の特捜部が向かってる。今の会話、リアルタイムで流してやったからな。大丈夫ですか真山さんっ！」

「ドンピシャだ、酒井。よくや…！？」

一瞬の隙をついて植草が銃口を酒井へ振る。

**ヴァズウウウーンツ！！…**

耳を裂く轟音と共に、三人の男が紙切れのように吹き飛んだ。

「ライオット…ガン…か…」

堀川が白眼を剥いて悶絶した。

植草は手摺まで吹き飛ばされ泡を吹いて転がっている。

超特大のエアショットガンの威力は火薬式のそれを上回る恐るべきものだった。

「真山さん！」

「…この…アホ…俺まで撃つな…」

駆け寄る酒井に笑いながら、真山もまた悶絶していった。

(続く)

逃

---

… ココは …

見下ろす顔が二つ。  
四つの目玉が煩わしい。  
気分が酷く悪い。

……

「気が付きましたか」

「酒井… 豪田…」

?…三人で飲んでたんだっけ…

!?

混濁していた意識がやっと焦点を結んだ。

「鴉は? 奴はどうした! あの内調の男はっ!!」

「真山さん、もう終わったんですよ。奴らまとめて引っ捕まえました。決着は着いたんですって!  
」

「そうだ。俺は鴉の奴と遣り合って…男が銃を…そこに酒井が来て…」

そこまで思い出し、正気に戻りかけた真山はすぐさま狂気に移行した。

「酒井っ!! おまえ何しやがる! 俺が射界に入ってただろーがあー! どこの世界に味方に向けてライオットガンぶっ放すアホがいる! 言ってみろオラァ!!」

ベットから半起きになって酒井の胸倉をワシづかみにした真山は、豪田も呆れる勢いでまくし立て怒鳴りまくった。

太い腕が真山を制する。

「その位にしておけ。傷に障るぞ」

傷? 傷って何だ!

俺はこのお調子者の薄情者を今すぐしめ殺して…

!!!

激痛が襲い、うめき声とともに真山は酒井を解放した。

「ゲハッ、ひ、酷いですよ真山さん、あそこで撃たなきゃ二人とも返り打ちだったじゃないですかあ〜 …ゲホゲホ」

「肋骨が5本折れ内臓に刺さってた。顔にもプラ弾が食い込んでた。目に当たらなかったのはラッキーだったな」

珍しく豪田が低く笑っている。

「運のいい奴だ、お前は」

SSの最終兵器とも言える対暴徒鎮圧用エアショットガン、通称ライオットガンは圧搾空気で無数のプラスチック弾を前方3〜4mの円錐状に打ち出す。

初期には鉛玉を使っていたが、あまりの威力に警察当局から圧力がかかり、止むなく弾種をプラスチックに変更したといういわく付きの武器だ。

有効射程は激減したが、至近距離では象でも倒すと噂されている。

「あんなモノ酒井に持たせたのはお前だろうが」

「鴉相手に酒井じゃ立ち打ち出来んだろ。親心って奴だよ」

笑いを堪えながら豪田が言った。

「沼田さんは？」

酒井が黙って首を振る。

そうか…

その時、病室のドアを蹴破るように別働隊の若いSSエージェントが飛込んできた。何事か豪田に耳打ちする。

「どうした？」

豪田の顔から笑みが消えていた。

「鴉が、消えた」

(続く)

部屋で荷造りを終えながら、真山はぼんやりと振り返っていた。

◇

矢部官房長官の逮捕が世間を騒がせたのが遠い昔のように、メディアはいつも通り芸能人の不倫やらペナントレースの行方やらにせっせとスペースを割いている

現職の官房長官の収賄事件など、アイドルの交通事故ほどのインパクトもなかったという事が平和とは無関心とイコールなのか、無関心でも明日を無事に迎えられる平和と言うものが素晴らしいのか

僕には判らない

北山さんは近々退院出来るらしい

シャバに戻ったらジムで鍛え直すと鼻息も荒い

元気なオッサンだ

酒井は休暇を終え業務に復帰すると伝え聞いた

相変わらず清水加夏子の見舞いには毎日行っているようだ

気のせいか少し遅しくなったように見えるが…気のせいという事にしておこう

今度の一件はアイツにとってもいい経験だったろう

願わくばあの調子で軽薄な後輩どもを大量生産してくれるというのが僕の唯一の望みだ

帰国してみたら、あぶないデカやラルパン三世もどきがゴロゴロしてるなんてのは耐えられん

豪田は…

何も変わらん

沼田さんがいなくなった穴を奴が一手に引き受けて、昼夜も無い程忙しいらしい

近々、警備部門のトップに任命されると聞いた

同期として出世祝いもせず旅立つのは心苦しいが、アイツはそんな事など気にもしないだろう

いつものように、

「じゃあな」

と言うだけに違いない

あのヘラクレスも、そうやって普通の管理職に、ただのオッサンになってゆくのだろう

沼田さんも

あの人も、そんな風に人生って奴を穏やかに風化させてゆけばよかったんだ

でも出来なかった

しがらみやこだわり、捨て切れない様々なものが、結局あの人に尋常な生を送らせなかった

哀しい性だと思う

反面、自分もまたそういう人間なのだという諦念のようなものを感じている

◇

このままアメリカへ渡り、それからどうする？

ボストンバックに衣類を詰め込みながら己れに発した問いは、忘れかけていたひとつの事実思い当たり霧散する。

鴉

ライオットガンの直撃を食らいながら、その日の晩に病院から逃走してのけた男。

何が奴を動かしているのか。

衝動か？

狂気か？

いや、違う。

あの夜、真山が全力でふるったナイフ、その白刃の雨を喜悅の表情を浮かべ潜り抜ける堀川の顔が今も脳裏にこびり付いて離れない。

奴は多分、こう思っている筈だ

血を流さぬ日々は退屈だ、と…

腕時計を見た。

空港に向かう時間だった。

(続く)



成田空港ターミナルビル。

早い便を予約したせいか、休日にしては人影が少なかった。  
意図した訳ではなかったが、無意識に一刻も早くこの国から離れようとしていたのかも知れない。

酒井には出発の時間を教えていなかった。  
勿論、北山さんや豪田にも。

手荷物を預けやる事も無くなったので、アナウンスが入るまでターミナルをうろついてみた。  
海外旅行だろうか、アベックや家族連れがチラホラと目に止まる。

不意に、家庭でも持ってみるかという思いが沸き驚いた。  
今の今まで、そんなことは頭に浮かんだ事すらなかったというのに。

◇

ステディな女性が過去、いなかった訳ではない。  
でも、関係を発展させる時間が僕には無さ過ぎた。

ひたすら鍛えた… 軀も、頭も。

厳しかった両親が共に事故で他界してからというもの、親戚をたらい回しにされながら、いつか誰にも頼らず一人で生きてゆけるようになるんだ、頼るのではなく頼られる存在になると、歯をくいしばり砂を噛みながら日々を送ってきた。誰かと情愛を育むには、僕の毎日はあまりに多忙で荒涼としていた。

望みが叶い、僕は恐らく世界最高の力を持つ者の一人となった。  
そして… 人々の暮らしを陰から護る自分に、いつしか暗い悦びを見出していた。

お前らの幸せなど、俺が居て初めて成立しているんだ  
何も知らない憐れな羊どもめ、精々、薄っぺらい幸せを味わっているがいい

力を身につけるに従い、僕の中にはいつしか傲慢な自分が育っていた。  
そいつは、そんな風に冷やかに世の中を見下していたのだ。  
今はそれがよく判る。

だが、二人の人間が僕の目を醒ました。

一人は、冴羽祐子。

僕の目の前でバラバラに挽き潰された女。

僕は3ヶ月の間、彼女の全てを見続けてきた。

明るく、いつも一所懸命に仕事や友達との日々を送り、落ち込んだ時ですら他人の悩みに懸命に答えようとしていた。

理解出来ないその姿が、いつか片時も頭から離れなくなっていた…

僕はもしかすると初めて、恋と呼ぶに値する感情を抱いていたのかも知れない。

警護対象者である彼女に。

そしてもう一人は、鴉。

自分の欲望のおもむくまま裏の仕事をこなす。

あれも又、自らに正直な者のひとつの在り方なのかも知れない。

奴に会ってみたい、もう一度

そして…

◇

願いは聞き届けられた。

「よう」

堀川はまるで友達に合いにきたような気軽さで僕の前に立ちはだかっていた。

(続く)

静

---

「鴉…」

「どこ行こうってんだ。俺はココだぜ」

大気中にふと生じた真空地帯。

ターミナル内のそこだけが、滅亡後の世界のようにガランとしていた。

真山と堀川。

彼我の距離、約6 m。

「よく逃げられたな、あの軀で」

「フン、種明かしするとな」

胸元が開いたシャツの間を堀川が拳で叩いた。

コンコンと厚板を叩いたような音が聞こえてくる。

「心臓と脇腹、腹筋の周りにセラミックを埋め込んであるのさ。何発か隙間に潜り込んできたが、マァ大した事にはならなかったよ。プラ弾だしな」

「成程ね」

世間話でもするようにポケットに両手をつっ込んだ真山が、数歩前に進んで足を止めた。

距離、3 m。

「流石にライオットガンの衝撃は凄くて気を失なっちゃったが、目を覚ました後は簡単だったよ。そっちはタダじゃあ済まなかったろうな。ケブラージャケットだけじゃ軀はボロボロだったろうよ。どうだい？」

堀川が片側の口許を引き上げた。

アバラが鈍く痛むのを真山は感じた。

「よく喋る鴉だな。見送りに来た訳じゃあるまい？ 其れとも土産でも持ってきたか」

視線を切らず、真山が足の位置を何気無く変えた。

あと2 mと少し。

「おお、スマンな。受け取れ」

堀川が後ろから小型の銃を取りだし、ゆっくりと真山の胸へ向けポイントする。

UZ I サブマシンガン。

至近距離ではこの銃の連射能力から逃れる術は無い。

「この間で懲りたよ、確実に仕留めるにはコレが一番さ」

「伝説の鴉ともあろう者が随分と弱気じゃないか。俺が怖いか？」

挑発しながら間合いを詰めようとしたが、UZ I の銃口が動くなと真山を制した。

「徒手空拳じゃお前には敵わん、悔しいがな。あれは合気か？」

今度こそ勝利を確信した堀川の笑みが満面になる。

表情を変えぬ真山が唇を強く噛んだ。

届かない……

「サテ、これでお前とも御別れだ。久しぶりに楽しかったぜ。じゃあな」

「ひとつだけ、いいか」

「？」

「貴様…… 退屈だったか」

堀川が同類を見る目でV字に笑った。

(続く)

去

---

◇

「レンジャーもSSも、俺にはいい遊び場だった。模擬戦闘ばかりの自衛隊に飽きてきた頃、中央のスカウトから声を掛けられた。渡りに船だったな。それから暫くの間は夢のようだった… 獲物は狩っても狩っても沸いてくる。マッタク、何が愉しくて次から次へ出てくるのか。皆んな俺に狩られたくて事件を起こすんじゃないか、そんな風に思いながら俺は寝る間も惜しんで走り回った。身に染み込んだ狩人の力を存分に解放してな」

銃を構えた堀川の顔は上気し、目は天界に遊ぶかのように至福に満ちていた。

「最高の時間だった。奴らは手加減などしない。生き延びる為、肥大した欲望をもっともっと満たす為、全ての力を俺にぶつけてきた。命の遣り取り程面白い遊びが他にあるか」

今にも涎を垂らしそうな顔で堀川が言った。

「真山、お前いま『退屈か』と言ったな。紳士ぶっても根は俺と同じなのさ。力を使いたくてウズウズしてやがる。あの夜の貴様はマトモな人間なんかじゃなかった。血を見たいんだろ？ 血を流したいんだろ？！ 俺のように！！」

「ああ… そうだ」

真山は答えた。

「俺は居られない。太陽の下… 家に灯る小さな明かり… 雑踏の中… 気が付けば何処にも身の置き所は無かった。誰よりも強くなろうとして、俺は何時の間にか誰よりも遠くに来てしまった」

「こいよ真山、俺と一緒に！ 手応えの無い犯罪者なんかじゃなく本物のキラーが、本物のフェダーイン（戦士）が血肉を飛び散らす世界へ！！」

堀川のUZIが瞬きする程の間、照準をそらせた。

最後の2mを滑るように真山が詰める。

右の拳が異様な形に握られていた。

中指の関節部を突出させた急所攻撃用の殺人拳、中立一本拳…

「真山あああー！！！」

野太い叫び声と共に轟音がたて続けに鳴り響き、急所を抉ろうとした真山の前から吹き飛んだ堀

川がエスカレーターの手摺を飛び越え階下に消えていった。

真山が我に帰ると、両脇にライオットガンを抱えた大男が仁王立ちしていた。

「豪田…」

「殺すな… らしくないぞ…」

堀川のUZIを何発が受けたらしい豪田が口から血を流しながら言った。

「お前は… そのままでいろ」

巨体が地響きをたてて後ろに倒れた。

どうやって警備員を呼んだか、真山はよく覚えていなかった。

(続く)

## 流夜

---

ダラダラと流れる汗を拭いながら黒いスーツケースを転がし道を急ぐ男。  
小洒落た身なりも、吹き出す汗が台無しにしていた。

ツタク、何で4人も見舞いさせられたあげくアメリカくんだりまで飛ばされなきゃならないんだ  
だいたいあのオッサン達はやる事が派手過ぎるんだよ  
奴らがジッサマになったら俺ぜったい税金払わないからな！

もう何度めかの呪いの言葉を呟きながら、酒井は道を急いだ。

◇

その日の午前、ICUから一般病棟に移った豪田を見舞った酒井を迎えたのは爆笑の声だった。

「さ、酒井い〜… いいトコにきた…ブッ！ こいつがさあ〜言ったのよ空港で、オレに真顔で」

達者でな  
先に逝くぜ

真山は豪田の口調を真似て言った直後、耐えきれなくなって何度めかの大爆笑に腹を抱えて転げ回った。

「もういい加減にしろや真山、筋肉兄ちゃん怒ってるじゃないか」

松葉杖をついた北山が苦笑を抑え切れずに、それでも真山を諭す。

「笑いたきゃ笑え」

ブスツとした顔で半身を起こした豪田が呟く。

「今度こそ駄目だと思ったのさ。だいたい誰が貴様を助けた？」

「よく俺までフッ飛ばさなかったな」

ヒクヒクと引きつりながら真山が聞いた。

「酒井と一緒にするな。スラッグ弾くらい知ってるだろう」

大粒の球をまとめて打ち出すスラッグ弾は面積より威力に重点を置き、狭い範囲にビー玉大の弾を5～6個バラ撒く。

「鴉はいなかったよ」

「フン。今度会ったらもう10発ほどおごってやる。UZIの礼だ」

顔をしかめた豪田が憤然と呟いた。

あれだけの弾を浴びながら、堀川はまたしても逃走してのけたのだ。

奴は死なない…

闇があるなら必ず現れる

奴は満たされぬ欲望を抱える者全ての姿であり

他者を食い殺して生きる原罪の体現者に他ならないのだ

そうやってしか生きれない、人にはなり切れぬ獣なのだ

憐れみが真山から笑顔を消した。

「真山さん？」

急に笑い止んだ真山に、怪訝そうに酒井が声をかけた。

「酒井、悪いがアメリカに行ってもらおう。俺の代わりだ。昨日付けで退職したよ」

「え？」

「今日からしががない探偵だ。北山さんと共同経営者さ」

「えええ？」

「もう昼間の仕事は出来ない。かと言って闇に沈む気も無い。流れる夜を見ながら、この街の底で皆を見守ってゆく。そんな風に生きてゆきたい… 決めたんだ」

ぽんと一つ、真山が酒井の肩を叩いた。

後は頼む… そう言いたげに。

◇

あの時の真山さんの目が忘れられないと酒井は思った。

俺にはこれから何が出来るのだろうか

タクシーを止めながら街を振り仰いだ。

行き交う人、車の騒音、濁った空の色。

ここには人生がある。欲望がある。不安も絶望も。

俺もあの人も、その中のちっぽけな『希望』を、これからも守ってゆくのだろう。



誰にも気づかれず。誰にも感謝されず。ただ寄り添う影のように。

それが俺達なんだ  
帰ってこよう、また、必ず

酒井を乗せたタクシーが成田へ向け走り出した。  
首都は、今夜も暑くなるらしい。

(了)